

新山協ニュース

第6号

新潟県山岳協会

発行者 鈴木敏雄

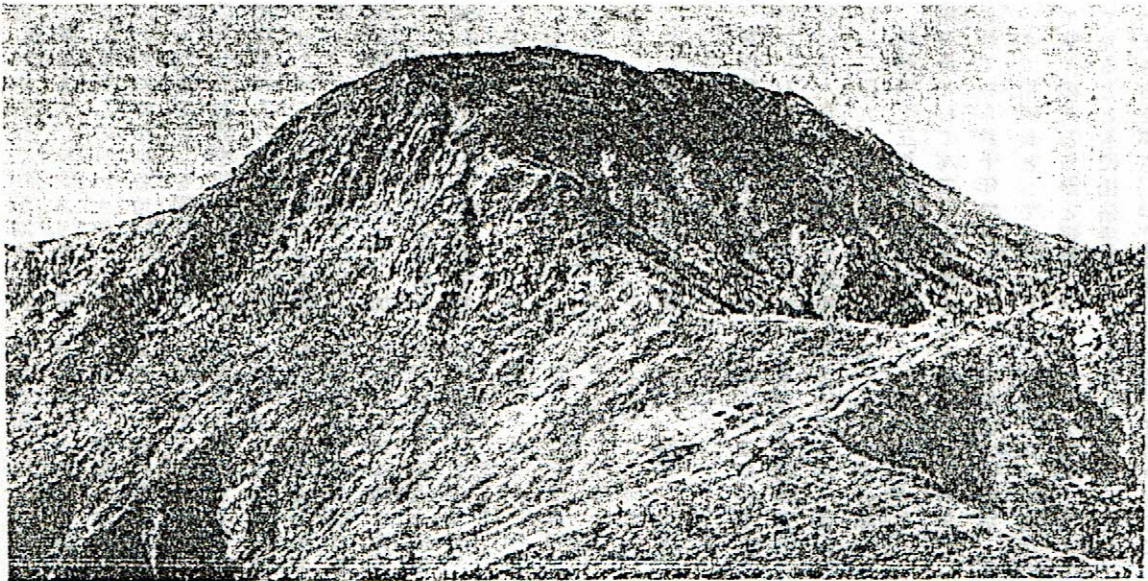
山岳会の老令化を考える

新潟県山岳協会長

室賀輝男

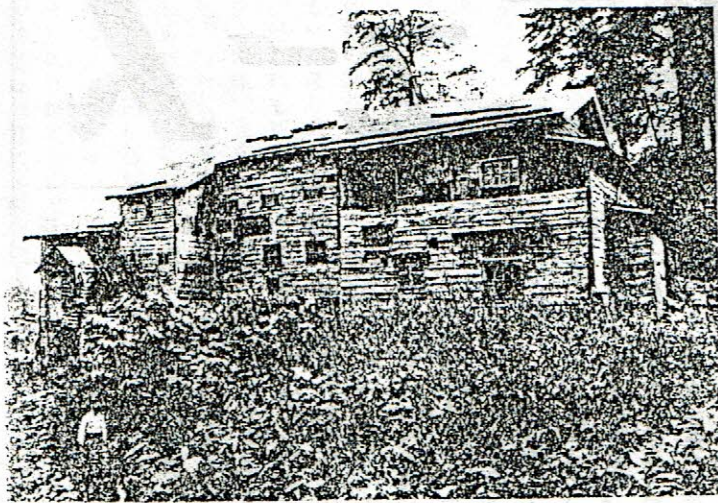
登山には定年がない。自らの体力や技術と合せ一人でも山行が出来るから、登る気持さえあれば、他人に迷惑をかける限り、終生楽しめる。私の所属するクラブではこの考え方に従い、万年現役制度を採用、OBと称する制度もなく年寄扱もしない。会員も老若男女多岐にわたっているから、毎月それなりの山行をたてて居る。そこで何時も考える事だが、他の多くのスポーツは体力の限界を過ぎると一線から離れ、やがてチームメンバーとも日毎に疎遠になるが山にはそれが無い。しかも人生は三度親友を求める機会があると云う。即ち、学校、職場、社会でと云われているが、私の経験からすると親、兄弟より以上に人生の相談相手になれるのが山を通じて得た友であり、実に多くの友人

に恵まれ本当に山岳会に入れた事を幸せに思っている。然し、こんな魅力の大きい山岳会にすべてではないが、何故か若人が入らないことである。娯楽機関の多い今日、山のみに期待をかける方が無理とは思うが、それにしても列車に乗れば、又山に行けば若人で溢れている。若者達が山岳会に入りたがらず、同好グループで満足し、又山岳会の伝統についての価値評価や、山岳会同志の相互扶助や、先輩よりの指導などの必要性を余り重視しないためかも知れない。それに輪をかけ吾々が、新人獲得の努力をおこたれば、やがて山岳会は老人クラブになり兼ねない。昔のように山岳会に加入し、勉強したいなどと云う気持は少なくなっている事は事実である。だがグループは環境変化により消滅



苗場の全容

柳沢一男写



和田小屋

し易いもので、花の如く一時に美しいが散り易いものであることを認識させ、若人に入生のよい相談相手を持せるためにも、よりよい山岳会に加入を勧めたいものである。又若人が求める方向を察知し、活動に新しい流れを作り出す積極的努力とその受皿づくりを日常心がけねばならない。並行した二本のルートを別々

先き頃、関西でロッククライミング・レースの企画がなされ、老若が真こうから賛否両論が出ている。即ち或る大屏風岩（高さ約三十五米）を舞台に二人一組で二ルートの岩登りのスピードを競い合うというもので、二ルートの合計タイムで勝敗を決めるが、

新しい体制づくりが期待されて居ります。マンネリ化の脱皮、風通しの良い土俵づくりのために昨年は各地域にきめ細く理事の充足を図り、専門委員会の設置を致し、精力的に活動に入りましたが、如何にせん限られた会費による運営は、役員諸氏の手弁当による活動も意の如く進まず、加えて味曾有の不況の大波におられ、活動がある程度犠牲になる面も出て、その成果が表れなかったのは残念でした。新しい体制による指導員検定会で、協会の強力なリーダーが多く今年誕生した事は特筆されることで偉力です。この方々のこれからの活動を期待し、広く協会の声を聞き、若い人達に魅力ある協会づくりに来年度は大いにはげみ、老化現象返上に皆さんと共に頑張ります。

指導員について

名誉指導員 齊藤平七

のパーティーが同時スタートして競い合い、スキーマン・レースに似た方法で応援しても楽しいものと主催者は云っている。これは海外では盛んでソ連では国際競技大会が行われたことがある。古いカラに閉じ籠りがちの山男の世界では、岩登りをタイムで競うのは山登りの基本姿勢にかかわる問題と思われる人も多かろうと思うが、既に若人の山登りの考えも此処まで来ていることを考え、逆にそのための安全指導、運営指導に乗り出す位の気持がないと組織に若い者を加えて消化して行けないと思う。ただ自然相手のスポーツであるだけに、如何に文明が進歩しても山登りの基本は変っていかないのは当然のことである。

県山岳協会から名誉指導員として見ている始末である。指導員は昭和三十六年度に制度化された。登山者の質を高めるために必然的に指導員を必要とした。そのためには不特定多数を対象とした「正しい登山」の指導、普及に相互研修によって自己の向上を計り身をもって当ってもらう、またより大きく注目することは山行中は勿論のこと山行以

省て県協会も創立三十年の歴史をふまえ、皆さんのご協力で確固たる基盤を確立してありますが、皆さんから満足される協会として一層前進をするためにも、未組織、未加入の山岳会を迎えるためにも、

昭和四十二年十月、第一種指導員として二一で認定されてから約十年である。さて指導員としてなにをして来たのだろうかと振り返って見るとともに山岳手帳を、いまさらながら引っくり返し

前の精神的、社会的な教育にまで大きな分野に及ぶ教育的存在であるとその任務と責任を談じている。

これをより明確にするために、昭和四十三年度から施行された指導員規定と認定規約は次のような位置づけをしているので抜萃してみるのも無駄ではなからう。

本質、安全、確実に、たのしい登山を指導できる人でなければならぬ。

任務 登山界のリード オフマンたる自覚をもち常に一般登山者の指導と登山のマナーの養成に心がけ、その範となるようつとめるとともに、正しい登山技術の指導普及をはかり、技術と道徳の向上によって登山の興隆発展につとめなければならぬ。

資格 全国共通の資格をもち、社団法人日本山岳協会や山岳団体が主催または共催する事業に優先的に参加することができぬ。

義務 社団法人日本山岳協会及び所屬山岳協会が定める

所定の研修会に出席しなければならぬ。

種類 名誉指導員、第一種指導員、第二種指導員の三種類とする。

そして名誉指導員とは第一種指導員としての実績を有するものが年令六〇才に達して所屬山岳協会の推せんをうけた場合に社団法人日本山岳協会、会長の認定によって指名される。

指名されたものは登録料を納付し、第一種指導員徽章を返還して名誉指導員徽章の交付をうけなければならぬ。

こんなように登山手帳を読み返しているとなかなか面倒なことばかりでリュックのほかに責任やら義務やらが重く両肩にドンシリと喰い込んで来るようだ。

さてここで考えることは面倒だから責任が重いからと云って放り出すほど底の浅い山登りをお互いして来たわけでもあるまい。小生は馬鹿の一つおぼえのようだが、自己に責任をもたない山登りをした

心算もないし、山そのものは常に厳しい自然の対象物でもあることを肝にめいじて、併せて趣味を同じくする多くの人々と接して自分を磨くともて、人格の養成、向上に努めて来た。

それには他の山岳会との相互研修等でお互いの人格を尊重し合うことが最も大切なことと思っている。また一つの山行で一つ盆の飯を食って山稜を岩場をヤブを本当に苦勞をともしして心を通じ合せながら、テラズ、おごらず同輩に後輩に登山の意義を滲透させて行くことで前述の重大責任は自から身を以って解決されるものだと思つて止まない。

ともあれ先ず自己の人格を鍛え上げることが先決でありそのうえ本当に軽い気持ちでオイノ山へ行こう!!と大きな声で叫んでみたい。

こんなあたりまえのことを認定証を手にして考えているようではまさに名誉指導員の領域に完全に足を踏み入れた証拠であろうか。(五三、三〇)

第32回国体を省みて

監督 徳 長 正

今回のテーマは、あすなる規則で審査基準を設けて審判を掲げて常緑高木ヒノキになるろうと永遠の若さと、たゆまぬ前進を託した。又スローガンは心ゆたかに、力たくましく全国の若人に栄光あれであった。国体の山岳競技は近年機会あるごとに話題になり、又各地の山岳会やその指導者の間でも話題となり、漸く競技と云う言葉も定着しつつある様に感じます。しかしこれから競技化への正念場でありましょう。但し、此処ではその競技の内容については別の機会もありますし、省略致しまして、これからの登山の本質の中での国体登山、競技化の問題点を振り返り、感じたまま述べ、今後解決して行かねばならぬ点など併せて考えて見たいと思ひます。

先ず競技化はルール作りで、それが競技基準であり、規則で審査基準を設けて審判する訳ですので、今後競技が円滑に行われる様になるには幾多の変革が行われるであろうと考えます。その変化は当然の事であり、大いに競技に参加してその本質が何であるかにふれて見る。そして本質に学び、本質を発見する。そこに今回の意義があった様に感じます。

天皇杯、皇后杯得点を目前に競技はエスカレートしておる様に思われます。青森では競技も変則的に行われ、問題は有りましたが、大会を肯定して出場したにもかかわらず、各界の選手、監督から大会(審査基準)に対する批判の声が多く出た事です。これも現段階では当然の面もありますが、未熟や体力不足からのものでなく、これから多勢の人に理解して貰うに値する批

判がなければと思いましたが、次に審判について、この点では非常に大切なのが公平と云う問題であります。他の競技と全く違った採点方法である限り、主観面が非常に多く、又条件が刻々と変る点であります。それを解決する事も今後の問題ですが、より多数の審判を必要とする点と、今回審判員は同一コースを毎日徹底して審査すると云う事が行われ、青森方式と呼んだが、又更に審査項目の分担が行われて行けば、今後は審判は審査のみと云う方式も考えられ現に気象及び計量、計時、計測は専任化せざるをえずして専任化されて来ております。公平のためにも、特に山岳競技は必要性に迫られて来ているのではなからうか。次に会場地から発生する競技規則の特例等、これは国体の開催県であっても、その競技フィールドを金で持ち合せない場合の競技であります。当然種目が崩られるでありましようし、行われる競技の方法基準も変

えねばと思えます。それではその場合の競技をより本質的に取組み、消化するかが問題です。終りに参加する監督、選手の心構えと申しますか、国体登山とか、競技登山以前のこととして、一般に云うスポーツマンシップの高揚を強く求められています。大会を終了して帰るまで、いや帰ってから永久に、選手として、又監督として合宿や予戦会を経て競技選手として決意した過程においても、自己の技量と努力の有った事は勿論であるが、吾々をとり囲く、学校職場、新山岳団体の間接的な力の多くある事も常に心して、それぞれの社会から当然、日常に於ても、その言動を批判される様な事の無い様、謙虚を気持で進もうと誓い合いました。

それは今後こそ生きる事で、この国体での体験を振り返って皆さんと共に生かしたいと思っています。

国体に参加して

成年男子

CL 森 庄 一

このたび青森国体山岳競技出場に際し、新潟県山岳協会の指導のもとに、合宿し、講習会を開き努力して来たが、入賞することが出来ず残念でござんた。支援戴いた関係者の皆様方に申訳ないと思っております。

国体の中で山岳競技の名称が正式に呼称されたのはこの青森国体からであり、得点に優劣を競うと云うのも今更な事と云うことで、競技と日常の登山とのギャップに戸惑いを感じたのは吾々だけではなかつたようだ。開会式の挨拶の中でも日常の登山との関係性を述べて居られたが、競技化されたことにより、別の登山が生れたとは考えられませんが、変型した点取り登山が行われねば良いかと思う。今回の成績発表は五位までで、

う。

とにかく五月の予選以来四ヶ月間、合宿だ講習会だと長い訓練期間を経て競技を終ってみると、ホッとしたり、ガクリきたり、あれもこれも出来ず残念と頭の中が混乱しています。新潟県山岳協会をはじめ、所属山岳会等関係山岳団体諸氏には昼夜の別なくご協力いただき、今更ながら山男の心に感ぜずにおられませんか。新潟県始め、関係市町村及び勤務先の皆様ご支援と激励有難う御座居ました。

今後は所属山岳会を通じ、楽しく安全な登山の推進に努め優秀な国体選手が生れるよう働きたいと考えています。

少年男子

長工 吉田 豊

②踏査登山競技では、コースの取り方、現地研究、態度、コース、事物、自然、景観の観察力、所用時間について、評価する側も、される側もまだまだそれなりの研究努力に回数が必要とされるものと思

今国体が終わって思うことはもう終わったのか、やっと終わったかの半々である。省みて5月の県予選から北信越予選会国体本番と5ヶ月間の大会のために頑張ってきた積りだ

が成績は余り芳しくなく心残りである。黒石駅で駅員からこの切符を記念にと云われさすがだと思った。受付では多くのご婦人の中にミス黒石よされと云う美人が僕達の案内をしてくれた。お茶、りんご、リンゴジュースと本場に関係したものが多かった。その夜は南風館と云う良心的な家で二泊三日お世話になった。この宿は又一度行きたいところだ。同宿の福井県選手と交流が出来て本当に良かった。特に監督のひげは忘れられない。落国体につきものの歓迎会は合ホテルの前の友情広場で行われた。味の散歩道、名店街、郷土のうたっこ、おどりこ、はやしこ、校歌、エール交換が行われ、生で聞く津軽三味線、民謡は格別で、ジュース、センベイ、リンゴ、そばの食べ放題で腹をふくらませ、又コケシの実演、ねぶたの運行など東北ならではの味だった。10月1日は開会式の日だ。国民宿舍十和田荘前からバス9台で青森へ。バス

ガイドの化人、長堀のおじさんがりんごのことについて色々説明してくれた。会場はバスで送られ、道中は美しい花が咲き乱れていた。入場行進は胸高らかに歩いた。会場からの判れるような拍手は感激であった。開会式に待電さわざが起り、各役員の挨拶にスピーカが鳴らなかつたのも思ひ出の一つだ。10月3日、いよいよ今日から競技開始である。猿倉温泉から大川原までの踏査でサブ行動であるこの日氣付いたことは、計量しない、装備点検がない、走っている人がいた、ことだ。10月4日、谷地温泉へ飯ヶ湯、計量がありうちのパーテーターは他よりサブが重いことがわかる。装備点検なし。ゴールに入りすぐ記録の提出であった。10月5日、葛温泉へ猿倉温泉で記録係はいたが調べなかった。以上のことから、われわれは他パーテーターより荷が重かった。アタックザックをもう少し重く選ぶべきだった。記録に時間がかかり過ぎた。踏査記

録に天候や気温を記入しなかつた。テントは家型であったが、ベグが多過ぎた。装備にもっと工夫改良が必要だ。体力をもっとつける。メンバーシップ、リーダーシップをもっと強力にせねばならない。計画書の内容がまだまだ不足していた。まだまだあると思うが僕はリーダーとしての自分の役割を果すことが出来なかつたと思う。ただ、誰もパテルことなく競技を終ることが出来て本当によかったと思う。国体を通じて色々の人に会え、話の出来たことは一生忘れられない。

少年女子

三条 小林 美代子

あすなる国体八甲田山を訪れて

どりのユニホームに身をつつみ、晴れやかに入場行進する姿が本当に我ながら感激せずにはいられなかった。その後黒石市に展り、中央スポーツ館での開始式では、明日からの山岳競技に出場する人が一堂に集った。どのような実力で、どのような力を発揮するのだろうか、その果のプラカードとメンバーの顔を見比べ不安になったり、おかしなったりした。さて10月3日、いよいよ登山競技の開始である。酸ヶ湯温泉へ田代平までのコースだ。硫黄の芳に送られトップを切る。ザックの重みでなかなか疲れた。特に大岳の登りはガレ場も多く歩きにくく、ルートもはっきりせず、加えて時間制限があり非常に疲れた。初日のためカンがつかめず記録、観察など本当に不備が多かった。晩にはシュラフに入ろうとした頃補助役員の高校生がテントを来訪してくれたが、疲れて余り話す気にならなかった。10月4日、葛温泉へ猿倉温泉だ

が、はじめは後尾の方を歩いたが、重裝備の集団行動で、遂に赤倉岳手前でキケンすることになった。女子隊にキケンが続出、女子の体力不足を感じさせられた。キケン後往路を下し、キケンチーム同士不思議と連帯感を感じ、和氣あいあい、明日から頑張ろうと思ひ、美しい八甲田山の紅葉を満喫した。10月5日、猿倉温泉へ大川原で約二四軒、時間配分に氣を使うコースだ。21番目の出発で余りあせらず急がず出だしは快調だった。時間より行動観察に重点をおいた。二四軒はやはり長く、歩いても歩いても道が続き、大川原小校のゴールに入り、地元の人や特に小学生が暖かく迎えてくれて心暖かい感じがした。部落の方々からリンゴやジュースのサービスを受け本当にうれしかった。10月6日、最後の日である。天候は余り芳しくなかった。前日このコースで男子隊にキケンチームが出たと云う事で、事前調査もしてないので多少不安であ

ったが、とにかくマイペースで行くだけだった。出発はラストであり気楽であった。登るにつれて風が出て来た。強風でこの私でも飛ばされるのではないかと思った。特に高田大岳を過ぎて仙人岱に着く頃は雨まじりの強風で特に大岳の登りは足場が悪くルートもはっきりせずおそろしかった。頂上から三〇〇米も下ると殆ど風もなく、高度差による気象条件の変化に驚いた。毛無岱の紅葉と湿地帯は美しかったがもうゴールに着く事のみで頭が一杯だった。全身ズブヌレでゴールに入ったときは無事四日間を終えた事と解放感に胸一杯だった。山岳部に入って三年間やって来たかいがあった。残念ながら実力不足で入賞出来なかったが、得たものは大きかった。

五月の県予選から此処までやって来たのも皆々様のお蔭です。ありがとうございます。青森で過した一週間は本当にかけがえのない、青春の一頁である。よい思い出とし

第32回青森国体

出場名簿

監督

徳良 正 長岡ハイキング

少年男子

森 庄一 長岡ハイキング

田沢康直 塩沢山岳会

金子 勝 秀峰山岳会

少年男子

吉田 豊 長岡工業高校

新発田繁人 新発田高校

山田 健 小千谷高校

少年女子

馬場匡子 三条東高校

小林美代子

皆木幸江

二月の二王寺岳

新潟交通山岳部

昨年四月に企画、十二月よりメンバーの調整や荷上げの検討をし、下越の山(越後の山)について、冬は雪洞泊りと定例になっていることからその予定で、計画しましたが、さて実行の段となると――。

「二月の雪はすぐ溶ける」ということと月火と気温が上ったことで合宿は雪洞泊りをとりやめ、冬山で天幕を張ったことのない新人が二名いたことで、その訓練も兼ねSL田原君と相談し、天幕使用と決定した。

メンバーの勤務等により荷上げの日が遅れ、合宿予定の一週前になってしまい、それも、前日からの降雪による交通状況の悪化のため二月四日、新潟バスセンター発六時二十分、新発田発七時三十分の板山行との接続が困難との情報により、次の板山行である三番バス十一時二十分に合わせ

二月十一日渡部君等の激励を受け新潟を発つ。バスは順調に走り新発田バスステーション隣りにできたジャスコの山小屋に寄ったが前の山小屋より何か気分が出ずにズッコケ店内見物となった。そこでメンバーの川口君の提案で安売りの子供用プラスチックソ

り?を求め再びバスに乗り中田屋に下車。雨気の雪は少しは雪らしくなったものの南風の部落まで道路は地を出し念願のソリ利用による荷物運びはベケとなりガックリ。それでも最後の農家から先は林道添にソリを使用してヤヤホクホクしたが神社の階段は二人がかりでやっと上げ斜面はダメと気付いた。

先週上げた食料等は前目神官の手により登山者用の小屋に移しまとめられていたが、一斗缶に入れたものは無事だったものの、四人の寝袋のうち赤い袋の二つは無事で青い袋の二つは鼠の餌食となりその一つは十×十センチ位の大被害となり、「やっと買った

羽毛だのに」と、ガックリしていた。色が悪かったのか何かついていたのか(付いていないようであった)誰か知っていたら教えてください。

そんな話でブリの刺身で飲酒。

翌日(五日)早朝に一王子へ上げる予定としたが、それも能力的に不可能となり、神社までの荷上げとなり帰りの長

翌朝全国的に二王子は晴れという渡辺記路君のとおり

前日上げた、モンテローザの3名のトレースを借り快調に一王子まで上げ、調子付いたこともあり、先行不安材料もあって、サブで二王子山頂をアタック、冬の飯豊を一見し下山。素の定油こぼしからガスの。

登りに付けた卒とベナントは有効で、他の登山者にもと春先にスキー登山するまで残置することにした。(使用した卒は一王子山頂間に二十丸本)一王子に帰ると雪洞泊りのモンテローザの三名は下山していた。早速、天幕設置ブロック積みをし、ワインで寝れをとり早々に寝る。

三日目、十三日は朝から降雪多く風も強いため訓練中止。緩べらしに持ち上げたソリで代り代り滑り、ブロックを補強し、大型便所を作る。二時三十分の定時交信は中条と真砂町とも不通、新発田市のハムとしばらく喋る。

四日目、十四日ははじめて冷え込み前日からの降雪で、新雪は二十センチ以上にもな

りトレースは全くなくなったが、基地を撤収して下山。登りよりつらい気がする。新潟には、新発田から一時間で着くところ二時間もバスに乗せられて、バスの暖房で、納豆になって着いた。(尚ゴミは新潟まで帰る)

中田屋〜二王子神社
 神社〜一王子 ……一・五時
 一王子〜山頂 ……二・五時
 山頂〜一王子 ……三・三時
 一王子〜神社 ……一・五時
 神社〜中田屋 ……二時

妙高山春山講習会

77、三月十二・十三日

計画では、池の平周辺でビッケル・ワカン・アイゼン・スキー訓練と盛りだくさんであった。しかし、この時期は新雪が降らなければワカンを使用するにはならないし、アイゼンには特に寒い早朝でなければ必要はなく、又、せっかく妙高高原まで来て、妙高

トランシーバー

(ソニーCB五百MW)

新潟——一王子
 中条——
 新潟——三王子
 長峰原——
 ーやや不良
 ー良好

山のTVが弱く下界が強力であれば快通と思われる。

鈴木・田原・川口・渡辺・佐藤(孝) 以上五名

鈴木 義男 記

山に登らない手はないであろうと検討され、時間の短縮を計るためスキーを使用して妙高山を目指すことになった。二日目の十三日、曇天ながら冷え込みでまずまずのコンディションとなり、朝早くリフトを乗り継いで終点へ。こ

こは通称・大石と言われている

る所でカナメまでは約十五分程である。カナメからはゴウダワラのトラバースの難所となる。シールをつけたままの人、ツボ足でスキーをかつぐ人と、それぞれ安全に通過して、南地獄谷を渡る頃には天気も回復して暑いようになる。

大谷ヒュッテでパーティーを、妙高山アタック隊十九名(うちスキー十七名)、大谷ヒュッテ残留隊六名にわけての行動となる。アタック隊は雪の状態が良く、順調に高度をあげて光善寺池で休憩、ここから見上げる雪を付けた妙高山東壁はすばらしく登高欲をそえられる。

今回は、登るルートが滑降のルートになるので、雪質・斜度・立木等の状態を見ながら登り、やがて、神奈山、赤倉山等の外輪山は足の下となり、最後の難所、鎖場の下に着く。鎖場は三十度を越す急傾斜で、安全のためにスキーをデポして、岩稜づたいに妙高山頂に登る。予定より少し早い十二時二十分。

妙高山頂はすばらしい展望が開け、北アルプス・戸隠・火打山・焼山・金山等の頭城の山々は手が届くようであり、反対側を見れば、中越地区から参加した人達は、あれが我が山々と遠くを指さす。四十分程昼食休憩をとり下降、鎖場の下でスキーをつける。スキーを使用しての登山は、何と言っても時間を短縮できる利点と、スキーそのものを滑るたのしみがある反面

①コースが整備されておらず立木等の障害がある。②荷物を背負ったのスキーになる。③スピードがついたため少しのことでも怪我につながる等の危険が伴うので十分注意しなければならぬ。ともかくどんな変な格好でも転倒するよりはましで、転ぶことは体力を消耗するし、怪我につながるので禁物である。

しかし、最初は、斜度感、スピード感等に戸惑い、転倒者が続出する始末である。この先が心配だったが、少し滑ると慣れてきてけっこう上

手に滑れるようである。ともかくスキーを持って登った十七名の迷スキーヤーは、無事スピーディに大谷ヒュッテに滑り降りる。

あとの難所は、ゴウダワラのトラバースで、長い長い斜滑降、転べば両地獄谷へかなりの距離をころげ落ちる所だが、全員無事通過してカナメへ。スキー場の上へは十四時三十分に着して解散となる。好天に恵まれ、すばらしい春山スキーを一日楽しむことが出来る。

越後の山は、山スキーに適した山容の山が多いので、これから何回かスキーを持って行き、山スキーを経験すればもっと楽しく、もっと早く、体力の消耗も少なく滑れるようになることでしょう。

(記 妙高高原山岳会)

駒村 一久

新年会

越後路の一月とは思えぬ陽光の日差しを受けた松の内も過ぎ、一月二十九日、前夜からの各型気圧配置は本格的な寒波で街並も白一色となり、国鉄飯山線も全型ストップの記事が紙面を飾っている。

案じた足並も予想外に出揃い、正午過ぎには、貸切りの会場ホールにわざわざ遠路会津から駆け付けた磯野、小椋両氏の顔も揃って総員七〇名の恒例の山岳協会新年会の開幕を待っている。

開会に先立ち、亀田山岳会酒井氏の好意によるNKKK空からのヒマラヤのビデオにしばし見とれ、小林副会長の司会により室賀会長の開会の挨拶、藤島先生の小談議と続き大先輩 佐藤金一氏の音頭で一同乾盃、新年の祝宴に入る。

飲み放題、食い放題の会場はビールよし、酒あり、ウイスキーありで、飲む程に酔う程に語調も高まり、一年の計は何とかやうで各地の山岳情報に、参会会員の友情交換にと話に花が咲く。

今年の新年会は、一昨年からの第三回目を数える新年会で、ここ新潟駅前アサヒホールの会場には所狭しと七十名の会員で埋まり、酒、酒、酒と任人酒豪の集いに変わる。

程に語調も高まり、一年の計は何とかやうで各地の山岳情報に、参会会員の友情交換にと話に花が咲く。

今年の新年会は、一昨年からの第三回目を数える新年会で、ここ新潟駅前アサヒホールの会場には所狭しと七十名の会員で埋まり、酒、酒、酒と任人酒豪の集いに変わる。

指導員研修会

田中 栄弘

汲む程に尽きない大酒宴も果てしなく、新潟県山岳協会の方で終止符を打つかの如く、万才、万才と幾度となく繰返され旧友相別れを惜しみつつ、夕暮迫る午後五時、すっかり雪に覆われた街角に姿を消した有意義な新年会であった。(鈴木 記)

(参加者) 順不同敬称略
関野重政 小林兼一郎 本田文雄 酒井定勝 藤田仁一 山岸栄三郎 斉藤平七 井口正男 小林智明 藤島玄 岡村憲 小出清 石田国夫 佐藤金一 藤田力夫 立川重樹

授与があり、引き続き、日山協の公認指導員検定基準のテキストによって、岩登り技術のザイルの結び方の重点項目、安全、確実性について討議し、午後より制動確保、懸

五十嵐篤雄 杉原八百樹 笹正和 川崎吉昭 山崎勉 川和男 堀内資二郎 奥津五郎 水崎忠司 柳沢一男 早川英夫 山崎幸和 石坂一郎 望月力 小林由夫 長谷川重 郷 横木修一 藤井信 花井啓 鈴木敏雄 高橋庄一 本望英紀 平田大六 渡辺竜吉 室賀輝男 田中栄弘 加藤明 文 加藤記代子 遠藤家之進 市

二月二十六日、晴天で町角に雪のある新潟の昭和大橋の東詰の新潟会館で、新潟県全域から集まった県下岳人八十余名が参加して、会員育成、指導員検定の件について研修会が開催されました。午前中五十二年度の第二種、地区の指導員検定合格者の認定書の授与があり、引き続き、日山協の公認指導員検定基準のテキストによって、岩登り技術のザイルの結び方の重点項目、安全、確実性について討議し、午後より制動確保、懸

午後三時より、今年度の長野国体の予選会の会場、日程概要の説明のあと、懇親会が和気あいあいのうちに四時すぎに閉会となりました。五十二年度で指導員になられた方

々で、第二種指導員

片桐一夫 杉本敏 竹田輝雄
霜島康夫 阿部信一 笠原嘉
明 安野正宏 遠藤一次 小
林光衛 増子輝男 本間博
堀井浩 竹中正治
地区指導員の方は
篠沢謙 中野貫一 森庄一
白石岩男 春日義 小宮山文
男 石山晟嗣 服部政夫 井
村健一 豊岡昭夫 浪花徹
竹内幸雄 金子武司 佐藤昭
夫 岩崎功 正田広司 五十
嵐昇

を御報告申しあげます。
冬山登山技術
向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

参加者は県内山岳団体指導
者をはじめ、地元教育委員会、
体育指導員、高校教師、警察
山岳救助隊員、スキー場管理
者と巾が広く、七日は六日町
ユースホステルで講師の新潟
地方気象台の倉島秀三先生の
「冬山の気象」について講演
次いで県協会役員から遭難救
助の実際、救急法、冬山では
これだけ知って置きたい、の
参加者との対談的な講習、安
くして手軽で日本人の非常食
の見直しに、尾西食品のα
(アルファ)米を使って料理、
試食を行い、又冬山では欠か
せないカンジキについて、市
販品、山村用品と比較検討、
簡単に確実な巻き方の研究が
行なわれ、夜は日山協の映画
観賞が行なわれた。

遭難救助と冬山登山の訓練に

者をはじめ、地元教育委員会、
体育指導員、高校教師、警察
山岳救助隊員、スキー場管理
者と巾が広く、七日は六日町
ユースホステルで講師の新潟
地方気象台の倉島秀三先生の
「冬山の気象」について講演
次いで県協会役員から遭難救
助の実際、救急法、冬山では
これだけ知って置きたい、の
参加者との対談的な講習、安
くして手軽で日本人の非常食
の見直しに、尾西食品のα
(アルファ)米を使って料理、
試食を行い、又冬山では欠か
せないカンジキについて、市
販品、山村用品と比較検討、
簡単に確実な巻き方の研究が
行なわれ、夜は日山協の映画
観賞が行なわれた。

遭難救助と冬山登山の訓練に

者をはじめ、地元教育委員会、
体育指導員、高校教師、警察
山岳救助隊員、スキー場管理
者と巾が広く、七日は六日町
ユースホステルで講師の新潟
地方気象台の倉島秀三先生の
「冬山の気象」について講演
次いで県協会役員から遭難救
助の実際、救急法、冬山では
これだけ知って置きたい、の
参加者との対談的な講習、安
くして手軽で日本人の非常食
の見直しに、尾西食品のα
(アルファ)米を使って料理、
試食を行い、又冬山では欠か
せないカンジキについて、市
販品、山村用品と比較検討、
簡単に確実な巻き方の研究が
行なわれ、夜は日山協の映画
観賞が行なわれた。

新潟県女子

遭難救助と冬山登山の訓練に
者をはじめ、地元教育委員会、
体育指導員、高校教師、警察
山岳救助隊員、スキー場管理
者と巾が広く、七日は六日町
ユースホステルで講師の新潟
地方気象台の倉島秀三先生の
「冬山の気象」について講演
次いで県協会役員から遭難救
助の実際、救急法、冬山では
これだけ知って置きたい、の
参加者との対談的な講習、安
くして手軽で日本人の非常食
の見直しに、尾西食品のα
(アルファ)米を使って料理、
試食を行い、又冬山では欠か
せないカンジキについて、市
販品、山村用品と比較検討、
簡単に確実な巻き方の研究が
行なわれ、夜は日山協の映画
観賞が行なわれた。

登山研修会

一、目的 本協会加盟団体には
女子会員のいる団体が多い。
また、国体登山には「成
年女子の部」の種目が設け
られた。このような現状に
おいて県内の女子登山者に
集っていただき研修登山を
する。

新潟県予選会

期日 昭和53年5月6日(土)
7日(日) 一泊二日
会場 米山及びその周辺
集合地 柿崎小学校(6日午
前9時より受付開始)
開会式 6日午前10時
閉会式 7日午後16時
競技種別及び種目
成年男子 成年女子は縦走
登山競技 踏査登山競技
登山はん登山競技の三種目

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

第19回

全日本登山

体育大会

日本山岳協会主催で行われ
る全日本登山大会が今年は蔵
王連峰で行われるので多数の
参加をお待ちします。
日時 五月二十五日(木)二
十八日(日)
会場 蔵王連 五万分の一
地図「白石」「上の山」
参加人員 各県原則として

四名一パーティとし幕営二
泊 旅館一泊
参加料・申込一切は当番県
より連絡あり次第通知します。

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

種別の年令
少年男女とも18才未満の者
(昭和35年4月2日以降に
生れた者)
成年男女とも満18才以上の
もの(昭和35年4月1日以

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

種別の年令
少年男女とも18才未満の者
(昭和35年4月2日以降に
生れた者)
成年男女とも満18才以上の
もの(昭和35年4月1日以

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

種別の年令
少年男女とも18才未満の者
(昭和35年4月2日以降に
生れた者)
成年男女とも満18才以上の
もの(昭和35年4月1日以

冬山登山技術

向上研究会
第八回目を迎えた県教育委
員会主催、県山協主管の研究
会が三月七、八両日、南魚沼
郡六日町で開かれた。参加者
は講義と実技に真剣に取り組
んだ。両日とも例年にない好
天で参加者に満足を与えたが
平日のため参加者が約六十名
と少なかった事は残念であっ
た。

種別の年令
少年男女とも18才未満の者
(昭和35年4月2日以降に
生れた者)
成年男女とも満18才以上の
もの(昭和35年4月1日以

前に生れた者)

日程 5月6日(土)

成年男女 踏査及び登はん
競技を行なう

少年男女 踏査競技

5月7日(日)

成年男女 少年男女とも縦
走競技を行なう

参加資格

県山岳協会加盟団体及加盟
学校の会員に限る。幾チ
ム参加しても可。選手3名
のうち1名はリーダーとす
る。(予選競技を受けない
一般参加者も歓迎します)

表彰 各種別の優秀3チ
ムに表彰する。

上期 (春)

遭難対策研修会

日時 六月三日(土)~四日(日)

会場 二王寺岳

集合 午後五時 二王寺神社

集合のこと。

研修内容

三日 午後六時より(日山

協の遭難救助技術テキスト
より)

一、事故発生から救助までの
体係

二、授業活動

三、救助法

四、その他 座学

四日

一、事故発生(仮定)による
実技

会 員 だ よ り

中条山の会 今 文蔵

二月四、五日猛烈な寒波の
中十名全員風倉山頂に立つて
無事下山、暖冬と甘く見たの
が厳冬になり、充分冬山の体
験もして来ました。

豊栄山岳会 皆川 満

昭和五十二年度冬山合宿は
一月六日迄、八日間飯豊連峰
大日岳を目標として実施。大
日岳直下にて敗退しました。

秀峰山岳会 小林由夫

三月上旬、栗ヶ岳にて当会
独自の春山講習会を予定して

います。これは低迷している
会活動の立てなおしと、親睦
を兼ね新人を対象にした内容
のものです。

と一ろっこ山の会 岩崎 功

昨年十一月には地区別指導
者研修会へ参加させて頂き、

大変勉強になりました。今年
の正月は山で雨にやられ、散
々でしたので今年の山行が思
いやられます。

映彩山岳会 筑木 力

ご無沙汰致して居ります。
小生中条勤務四年目に入り、
依然通勤大旅行をして頑張っ
ています。いま山行は月一回
高体連時代より減りましたが
夏は一昨年飯豊、昨年朝日を
やり、今年も大きな山へ入る
計画です。毎日一時間体力ト
レーニングをやり、心身共に
快調です。

新潟ビオレの会 三富一弥

長女が高卒就職、息子が高
校入試、次女が中学へと三つ
一詰にテンテコ舞いの此頃で

す。暇を見つけてスキーをう
まくなりたいたいとグレンデに通
っています。先日は新潟市登
山教室の皆さんとスキー合宿
に参加。ビオレの会のスキー
登山等参加しました。

高体連 沢田俊一

一月中旬の日赤救急指導講
座(今市市青少年スポーツセ
ンター)に、本県からは私と
中条工業の五十嵐先生の二名
だけでした。内容は必らずし
も満足のいくものではありま
ませんでした。役には立ちま
した。

身辺多忙のため山行(二ヶ
月ほど)全くなし。二月後半
三泊四日、暮営登山合宿を行
う予定。三月後半には巻機
白毛門縦走登山をする予定。

秀峰山岳会 高橋小一郎

暮の二十五日に脳卒中を起
し入院加療中でありますが、
経過は良好です。年内には職
場復帰可能と思います。その
間ご迷惑をお掛けいたします
が、よろしくお願い申し上げます。

柿崎山岳会 西村道博

米山は例年より積雪が少い
反面、尾根すじの雪庇が不安
定で注意を要す。又登山道も
ブッシュが多く苦労が多い。

糸魚川山岳会 竹中正治

冬の間は専らスキーに明け
くれ、天気落ちつきのを待
ってスキーツアーに行きます。
三月上旬蓮華温泉の尊成式が
あり、四月には焼山登山の計
画があります。

高体連三条高校 石黒恭博

現在部員十一名(三年は除
く)で公式大会、本校独自ス

笹神村うすゆき山の会

石山巖嗣

一場で思う存分スキーを楽しんで来ました。

父(五六才)がガンで死亡

し多忙の毎日を送って居ります。山へは五十三年に入って

高体連新潟工業 安野正弘 新年お目出とうございます。

一回五頭山へ登ったのみで、

クリスマスに生徒をつれて二王寺に入りました。雪は少な

計画として二月十三日に焼峰登山を計画しています。

王寺に入りましたが、雪は少なかったですが、いい合宿ができたと思っています。三月下旬に春山合宿でまた二王寺に入ります。現在クラブ機関紙

映彩山岳会 坂井 厚

三月二十日菱ヶ岳へ五頭山スキー縦走。六月五日へ六日月山スキー。七月三十日へ三十一日足転沢へ北股岳スキー登山。八月十三日へ十五日山都口へ三国岳へ北股岳へ温ミ平。

御無沙汰致して居ります。正月は会の山行で谷川岳を天

九月二十三日巻機山ヌクビ沢往復。十月三日へ四日 差岳

神尾根より登り、二月上旬、単独にて守門岳登山の折は、キビタキ付近で三日間の停滞

を余蔭なくされ、つくづく単独の難しさ、淋しさを思い知らされました。

新潟交通山岳部 鈴木義男 一月八日二王寺偵察(神

焼峰山。十一月十三日二王寺岳。十二月三十一日へ一月一日菱ヶ岳を登りました。

子岩まで)二月四日へ五日二王寺神社へ荷上、二月十一日

日菱ヶ岳を登りました。

十四日二王寺冬山合宿訓練

長岡山岳会 畔上次郎

前略 最近老化防止に若

越稜山岳会 内藤新一郎

新年は雨の合宿でしたが、

一月中旬八ヶ岳で冬らしい山

頃登った山をスキーで滑って

行が出来ました。二月に入り

居ります。リフトは有難く登

十日へ十四日までニセコスキ

りの半分は助かる山もありま

すが、守門や浅草は登りは苦しい。真冬はスキー場で、春

年春山スキーはどこにしようかと思っただけでも老化防止になるようです。

十日町山路野会 金子武司

正月の登山合宿以後山らしい山に行けず、スキーその他

又豪雪のため思うように活動

出来なく、三月になれば雪上

訓練等が近くの山で出来るようになると思います。

新潟交通山岳部 鈴木義男

一月八日二王寺偵察(神

子岩まで)二月四日へ五日二

王寺神社へ荷上、二月十一日

十四日二王寺冬山合宿訓練

五名。一王寺に雪洞泊りした

モンテローザ三名に会う。ベ

工場で中気が出て、一ヶ月入

院させられて、山へ登るのも

が、眼底出血の方が芳しくな

まう。山に登りたい。スキー

に行っても転ぶ位なので自分

自身が嫌になってしまう。

今、佐渡のスキーの発展を

願いスキー場の運営やら、初

心者指導などを行っています。

佐渡の山はスキーには最適で

す。ゲレンデを飛び出して山

スキーの醍醐味や雪山の素晴

しさを雪に閉じ込められた佐

渡の人々に知らせ、共に楽し

みたいと考えています。

飛行、泊りを重ね、最新大型

バス、やっとヒマラヤの見え

る処へやって来た。意外のこ

とで、ヒマラヤの高峰に雪は

無かった。というより、私の

希望のそれは、雪髯が見たか

ったのだ。ヒマラヤ襲のない

山の連なりが、白昼晴天の空

の下に、山越阿弥陀のように

すばんと立って、幾重にも重

なる前山は、耕して山嶺に至

る式の段々の棚田である。御

同行象は、初めて地方テレビ

局に出てマイクを持った若い

歌手のように、貧乏ゆすりし

てカメラを構え、片端からシ

70 過ぎて

ヒマラヤへ

藤島 玄

ヒマラヤに雪はなかった。

半面にだけ太陽の受ける長い

い雲表の飛行。乗り継いでも

が、何か大きな期待と、いさ

だんだんと身も心も燃焼して

行く。壮麗な美しさがどう変

チャンスを狙い始めた。炭火を吹き起して炬燵へ入れてやと足を入れるか、入れぬうちに俺も入れてくれという奴だ、それはいい、無知から来た物真似だ。それにつられてガチャガチャくつわ虫はこっちのカメラだ、ああ何をかいわんやだ。写真の色彩効果を知らん無知からの物真似だ、雪煙も吹かず、雪襲もない。真昼のヒマラヤなど日本アルプスと大差なしだ。

ヒマラヤに音がなかった。ヒマラヤの自然と対話のつもりが、あんまり音なしの意外であった。聞くのは夜の犬の鳴声と、朝晩の雉と鳥の鳴声だけだ。風の声、雨の音もとうとうしなかった、季節外れの乾期の訪れだ。小鳥の啼りもない、渡り鳥の鳴き声もない。蠅も蚊も虻もない、音を出さぬ蚤、虱すらつかなかった。しかし、最大最良の人工の音楽があった。ヒマラヤに対して凝然と対している朝な夕べに、ロンロン、微妙にして複雑な鐘と鈴の音がしてくる。朝は朝露に地面が濡れている、夕べは乾いて

土煙が立つ、私はこれを糞塵と云いたい。その、霧、糞塵の中から驃馬のキャラバンが通って行く。十匹前後を一隊として馬子が後尾で追う。三隊五隊と続くのだ。荷をつけた先頭馬は、面がいの上に幣束のような赤毛か白毛を立てて、鼻面に四角な鐘をピカピカ輝かし、喉下に鐘、首筋に鈴を運ねる。一步一步その復合音が日本にない響きを送ってくる。心に浸むような深さと、何か心を揺り動かす原始な震動を漂わしてくる。この響きは遠くへ伝わらない。来たなど、音を心に訓み込んでいるうちに、突然のようにボカッと消える。もう隊商の長い行列がどこへ行ったか、見えないのだ。まるで映画音楽そっくりだ。その若い馬子が笛を吹く。ヒマラヤの山谷に相応しい音だ。りょうりょうと、心をかきむしるようになってくる。たれか故郷を思わざるだ。安っぽいその堅笛を邪魔臭いの最後まで荷物に突っ込んで持ち帰った老人がいる。私はその老人の心は詩人なんだと今も思っている。

あとがき

◎春山を迎えて
今冬もまた多くの遭難が発生した。身も心も凍りつくような吹雪と闘った冬山も終った。太陽が次第に活力を増し地表と雪の接点に融水が走る。今まで安定が保たれたパランスがくずれて雪は崩れる。地肌には緑が顔を出し越後の山々にも春がそこまでやってきた。行動範囲が広がる春山にはいろいろの危険もある。雪崩をさけ、沢筋の踏抜きなど充分に注意して登山活動を心がけていただきたい。

◎協会行事の参加を乞う
協会主催の行事が催されても特定の顔馴染みの会の参加のみでもう一つの協会行事としての盛りあがりがない。協会行事は魅力がない。参加しても得るところが少ない。理由はいかにあれ、協会としては謙虚に受けとめ、内容の充実したもの、参加者が参加してよかったという行事を心がけ考えなければならぬ。加盟団体は協会行事をひとごとと思わず自分達の組織であることを認識して、積極的に参加する中で、不満点を主張し解決しながら健全登山を発展させるべき協力を望みたいものである。

◎指導員制度(検定会)
協会53年度行事に指導員検定会(地区、二種)が行なわれる。全国統一した検定体制の中での検定会は厳正なものである。検定会後とかく不合格になったものから批判的な山がでる。もう一度指導員制度について各会で検討し理解を深めていただきたい。協会これまでの検定会では、受検者を配慮して検定会に先がけて事前講習会も開いている。通り一辺の指導員検定会に受検するだけでなく、数多い協会行事に参加し、リーダーの役割に協力したり、自分の登山技術や考え方を発表する場、また行事に参加することで全国的登山界の姿も知り小規模的登山活動から更に発展を期待したし、指導員の新しい仲間が増えることも希望したい。

藤井 信

(一九七七、十、二)